

## 『正倉院文書拾遺』後の庫外正倉院文書

After the Publication of “Shoso-in Documents in External Collections”

OGURA Shigeji

### 小倉慈司

国立歴史民俗博物館は1985年10～11月に企画展「正倉院文書展」を開催し、1992年3月に便利堂製作にて『正倉院文書拾遺』を刊行した。同書には75点の庫外正倉院文書が掲載され、他に所在不明文書として4点が記されている。これら庫外正倉院文書に関する『正倉院文書拾遺』解説の補足とその後の状況について、関連研究も含めて報告したい。

#### 1 新たな庫外正倉院文書

『正倉院文書拾遺』刊行以前であるが、東野治之氏は和田維四郎『訪書余録』本文篇（1918年刊）に挿図として「天平廿一年正月十九日」の日付を持つ大鳥連春人の試字が掲載されていることを指摘し、それが正倉院流出文書と見て問題ないことを論じられた〔東野 bd〕。また東野氏は『集古会誌』や『集古』に文面が掲載された林若吉（若樹）旧蔵食口案断簡（紙背写経生試字）も紹介されている〔東野 ce〕。加えて『正倉院文書拾遺』で所在不明文書とされた74（正倉院文書拾遺番号、以下史料名の前の洋数字番号は同じ）浄野人足手実について水戸幸所蔵の手鑑『紫の水』に収められていることを指摘された〔東野 de〕。他に、参考として掲げられる所在不明文書のうち、蜂須賀茂韶氏旧蔵の天平勝宝3年（751）写経所請経注文については、1978年東京国立博物館にて開催の「特別展 日本書」に出陳されたことがあった〔東野 e〕（同展示図録には「天平九年七月十八日」の日付を持つ「山辺諸公手実」も掲載されている）。

なお、既に『正倉院文書拾遺』の解説で触れられていることであるが、33桑原村主安万呂試字の紙背にはかつて天平19年（747）造一切経所の文書があったとされている〔東野 b〕。また『経籍訪古志』によれば、日名子文書中の55造菩薩願文断簡にはさらに続く3行があったようであり〔東野 a〕、そのことには『正倉院文書拾遺』解説には触れていないので、ここで指摘しておくこととする。

『正倉院文書拾遺』刊行後としては、2006年に太田正弘氏によって、細野要斎『感興漫筆』巻11に見える正倉院文書の持ち出し記事が紹介され、天平20年（748）3月28日鬼室石次手実や天平勝宝元年（749）12月9日久米熊鷹給布施文の流出が明らかにされた。さらにその後、丸山裕美子氏が『感興漫筆』も含めた細野要斎の随筆を精査され、この他に天平20年3月28日道守豊足手実、

---

宝亀5年(774)10月12日大伴部国忍手実なども存在していたことが報告されている[丸山bcd]。

丸山裕美子氏はまた『正倉院文書拾遺』に図版が掲載されなかった天平宝字2年(750)7月28日万昆嶋主請暇解について調査され、若山善三郎編『尾参勢郷土史料』(名古屋温故会 1939年)に掲載された図版の紹介を行なわれている[丸山a]。これは1943~44年頃、古書店に売りに出されたものであった[反町230頁]。

この後、2012年にいたり万昆嶋主請暇解は奈良国立博物館の所蔵となり、同年6月から7月にかけて一般公開され、およそ70年ぶりに研究者の目にも触れることとなった[野尻abc]。また東京大学史料編纂所のマイクロフィルムによって存在が知られていた天平宝字6年4月の近江国愛智郡司解が2011年に九州国立博物館の所有に帰した(加藤友康氏および酒井芳司氏からの御教示による)。

なお続修後集43に収録される天平勝宝4年(752)の買新羅物解文書については、もとは鳥毛立女屏風下貼文書であって他の正倉院文書とは来歴を異にしているため、そのツレ(一連の文書)にあたる外部流出文書の存在(尊経閣文庫所蔵『尊経閣古文書纂』編年所収)も早くから知られているものの、一般には「庫外正倉院文書」の範疇には入れられておらず、『正倉院文書拾遺』にも収録されていない。この買新羅物解文書の断簡がさらに存在することが、1994年に皆川完一氏によって紹介された[皆川a]。それは京都大学文学部博物館(現京都大学総合博物館)所蔵影写本『並川文書』中に見られるもの(再影写本が東京大学史料編纂所に蔵されている)で、現所在は不明となっている。

## 2 庫外正倉院文書の移動

報告者が把握しているもののみであるが、『正倉院文書拾遺』以後に所蔵者が移動した正倉院流出文書について、掲げておきたい(別表)。これらの多くは公的機関が所蔵者となったものであるが、それは公的機関であるが故に所有者変更が確認できたためであり、この他に個人ないしそれに類するレベルで所蔵者が変更になっている事例もあることと推測される(なお別表作成にあたって、横内裕人氏、野尻忠氏、加藤友康氏、酒井芳司氏に御教示いただいた点がある)。

## 3 庫外正倉院文書についての研究

上述および別表にて触れた以外の庫外正倉院文書に関する近年の研究について触れておきたい。26・27の2通の山辺諸公手実については早く大平聡氏が検討を加え、27が偽文書であることを指摘されていた[大平a]が、さらに専論を記し詳細に論じられた[大平b]。それに関わる手実帳(後写一切経手実帳 続々修第1帙巻4および第23帙巻4、『正倉院文書拾遺』25・26・61)の接続関係については飯田剛彦氏の調査が報告されている[飯田]。

日名子文書に関しては稲田奈津子氏が森川杜園による模写を調査紹介され、現状では裏打ちのために判読が困難な50ウ写疏筆墨充帳について釈文を作成し、また日名子文書の伝来についての知見を加えられた[稲田ab]。

庫外正倉院文書に捺された偽印については皆川完一氏が検討を加えられ[皆川b]、また「東大寺印」と「造東寺印」を中心に論じられた田中史生氏の研究もある[田中]。

---

別表 『正倉院文書拾遺』後に所蔵者が変更となった正倉院流出文書 附東大寺開田図

拾遺	指定	文書名	旧所属	現所在	移動年月	備考
2	重文	豊前国仲津郡丁里戸籍 (検受疏目録)	東京(個人)	奈良国立博物館 1262	1998年12月	蜂須賀家・弘文荘旧蔵 村口伸一より 国が購入『古代日本 文字のある風景』
11	重文	校生手実帳	京都・小川広巳	文化庁	2006年1月	橋井善次郎旧蔵 2006年「新たな国民 のたから」展出陳
16		写千卷経所食物用帳 (写経試字)	京都・小川広巳	小川家		
18	重文	奉写一切経所銭納帳	京都・小川広巳	文化庁	2006年1月	橋井善二郎旧蔵 2006年「新たな国民 のたから」展出陳
21		王広麻呂手実	東京(個人)	国立歴史民俗博物館 H-1587	2002年3月	反町十郎旧蔵 『正倉院文書研究』9口 絵
26		山辺諸公手実	東京・八木壯一	国立歴史民俗博物館 H-1821-1	2011年2月	八木書店より購入
27		山辺諸公手実	東京(個人)	国立歴史民俗博物館 H-1821-2	2011年2月	八木書店より購入
30		答他虫麻呂手実	東京(個人)	国立歴史民俗博物館 H-1587	2002年3月	『正倉院文書研究』9口絵 反町キクエ より購入
69	重文	写経料紙充帳	京都・小川広巳	文化庁	2006年1月	2006年「新たな国民のたから」展出陳 『古文書研究』62
71	重美	奉写一切経所紙納帳	愛知・関戸佳基	文化庁	2005年2月	田中光顕・大口鯛二等旧蔵 水戸幸商 会より購入 『月刊文化財』513 『古文 書研究』66 2006年重文指定
72	重美	無下雑物納帳	(所在不明)	国立歴史民俗博物館 H-1517	2000年2月	鈴木英雄旧蔵 紫書苑永津登(名古屋 市東区)より購入 『正倉院文書研究』7 口絵
74		浄野人足手実 (写経手鑑『紫の水』所収)	(所在不明)	奈良国立博物館 1361	2006年3月	神田喜一郎・弘文荘旧蔵 赤坂水戸幸 より購入 『鹿園雑集』8
※01		造仏所作物帳(常本充紙帳)	(蜂須賀茂韶旧蔵)	奈良国立博物館 1196	1995年3月	安達雅彦寄贈 『奈良国立博物館の名 宝』126-1 奈良博図録『天平』14
※04	重文	万昆嶋主請暇解 (写千卷経所食物用帳)	(板津七三郎旧蔵)	奈良国立博物館	2012年2月	一誠堂書店より購入 『奈良国立博物 館だより』82 「奈良国立博物館の所蔵 品になった正倉院文書について」『月 刊文化財』597 『正倉院文書研究』13 口絵 2012年重文指定
※		近江国愛智郡司解		九州国立博物館 zz7839	2011年9月	弘文荘旧蔵 天平宝字6年4月 『弘 文荘待賈古書目』36
参考	国宝	越中国射水郡鳴戸村墨田図		奈良国立博物館 1420	2007年12月	八木書店より購入『日本歴史』721口絵 『正倉院文書研究』11 『奈良国立博物 館だより』67 『月刊文化財』549・561 2009年重文指定, 2010年国宝指定

(注) 「旧所属」は『正倉院文書拾遺』の記述による

なお、国立歴史民俗博物館所蔵の正倉院流出文書については料紙の観察を中心として渡辺滋氏および穴倉佐敏氏の調査が行なわれている〔渡辺, 穴倉 ab〕。

買新羅物解文書については、1で紹介した皆川完一氏の論考の後、それも踏まえて内容に検討を加えた東野 f 論文が発表されている。

なお本研究では2012年に天理大学附属天理図書館所蔵正倉院文書の調査を行なっており(調査者は、飯田剛彦、佐々田悠、杉本一樹、富田正弘、仁藤敦史、小倉の6名)、『正倉院文書拾遺』に補足すべきいくつかの点についてここで記しておくことにしたい。

5 河内国大稅負死亡人帳…現状は『正倉院文書拾遺』図版とは異なっており改装されている。上辺 13.6cm, 下辺 13.0cm, 左辺 26.7cm。

20 奉写一切経所食口案…裏の剥がしとりがなされているかどうかは不明。

23 柏原大嶋手実…上辺 10.0cm, 下辺 9.0cm, 右辺 10.0cm, 左辺 28.7cmで、図版からも確認されるよ

うに、右端には糊痕が存在し、右下端は破れ。左から下部にかけて斜めに折線が3本程度走る。裏の墨界の有無は不明。表面に雲母が確認される。表装時のものか。

25 錦部君麻呂手実…料紙は茶褐色であるが汚した可能性があり、また紙厚は薄い。上辺から4.6cmほど、24.3cmほどにそれぞれ天地墨界が確認され、また約1.9cm間隔の縦墨界も10本確認される。「天平廿年」の右側は剥がれに修正をかけている可能性があり、その部分の墨界は後からなぞっているように見られる。

33 桑原村主安万呂試字…下辺20.5cm、左辺28.2cm。

#### 参考文献

- 飯田剛彦 「年次報告 調査5古文書」『正倉院紀要』27 2005年
- 池田 寿 「(口絵解説) 奉写一切経所紙納帳」『古文書研究』66 2008年
- 稲田奈津子 a 「森川杜園『正倉院御物写』と日名子文書」『正倉院文書研究』11 2009年  
b 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター編・発行『森川杜園『正倉院御物写』の世界』2009年
- 梅澤亜希子 「(口絵解説) 写経料紙充帳」『古文書研究』62 2006年
- 太田正弘 「正倉院文書を持出した男」『季刊ぐんしょ』再刊71 2006年
- 大平 聡 a 「いま、語りだす正倉院文書」篠原義近編『道は正倉院へ』読売新聞社 1989年  
b 「正倉院文書の偽文書」『古代文化』45-3 1993年
- 古藤真平 「(図版解説) 天平廿年十月廿一日付『造宮省輔藤原宅牒』」『古代文化』50-7 1998年
- 宍倉佐敏 a 「国立歴史民俗博物館蔵 古文書・古典籍料紙の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』160 2010年  
編者 b 『必携 古典籍古文書料紙事典』八木書店 2011年
- 反町茂雄編 『紙魚の昔がたり』昭和篇 八木書店 1987年
- 田中史生 「「東大寺印」と「造東寺印」」『国立歴史民俗博物館研究報告』79 1999年
- 東野治之 a 「正倉院日名子文書の「造菩薩願文」」『遣唐使と正倉院』岩波書店 1992年 初出1986, 1989年  
b 「『訪書余録』所載の写経生試字」『日本古代史科学』岩波書店 2005年 初出1989年  
c 「写経生試字紙背の食口案断簡—正倉院流出文書の一例」『日本古代史科学』前掲 初出1990年  
d 「正倉院文書の流転」『書の古代史』岩波書店 1994年 初出1992年  
e 「(新刊紹介) 国立歴史民俗博物館編『正倉院文書拾遺』」『史学雑誌』102-1 1993年  
f 「新羅交易と正倉院宝物」『日本古代史科学』前掲 初出2002年
- 西山 厚 「(新規収蔵品紹介) 書跡」『鹿園雑集』8 2006年
- 仁藤敦史 「(口絵解説) 手実二点」『正倉院文書研究』9 2003年
- 野尻 忠 a 「奈良国立博物館の所蔵品になった正倉院文書について」奈良国立博物館 HP 2012年4月3日  
b 「(名品展のみどころ) 万昆嶋主解」『奈良国立博物館だより』82 2012年  
c 「(口絵解説) 万昆嶋主解」『正倉院文書研究』13 2013年
- 文化庁文化財部 「新指定の文化財」『月刊文化財』513 2006年
- 丸山裕美子 a 「板津七三郎氏所蔵「万昆嶋主不参解」について—附 山田幸太郎氏所蔵「丸部足人解」について」西洋子・石上英一編『正倉院文書論集』青史出版 2005年  
b 「細野要斎(忠陳)『葎の滴』の中の正倉院文書」『日本歴史』741 2010年  
c 『正倉院文書の世界』中公新書 2012年  
d 「尾張名古屋の正倉院文書」『正倉院文書研究』13 2013年
- 皆川完一 a 「買新羅物解 拾遺」『正倉院文書と古代中世史料の研究』吉川弘文館 2012年 初出1994年  
b 「正倉院流出文書の偽印」『正倉院文書と古代中世史料の研究』前掲 初出1998年
- 吉岡眞之 「(口絵解説) 无下雑物納帳」『正倉院文書研究』7 2001年
- 渡辺 滋 「国立歴史民俗博物館所蔵の古代史料に関する書誌的検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』153 2009年

---

【付記】

本稿は東大寺総合文化センターで2013年1月26日に行なった口頭報告に野尻忠氏・加藤友康氏の御教示および石上英一氏の御要望により付表のデータに修正を加え、またその後に気づいた点について増補・訂正を加えたものである。九州国立博物館所蔵文書のデータについては酒井芳司氏より御教示いただいた。口頭報告後に刊行された『正倉院文書研究』13所収丸山d論文には「正倉院宝庫外流出文書リスト」が掲載されており、また本報告で看過していた小杉楹邨影写本による現所在不明文書についても言及されている。3通の山辺諸公手実については本口頭報告と同日に飯田剛彦氏が口頭報告を行なわれ、この号に原稿が掲載予定とのことである。

〔追加付記〕脱稿後、奈良国立博物館所蔵の正倉院文書について言及した野尻忠「奈良国立博物館の古文書」『古文書研究』76(2013年)、九州国立博物館所蔵近江国愛智郡司解を紹介した酒井芳司「紙本墨書近江国愛智郡司解 天平宝字六年四月付」『日本歴史』793(2014年)が刊行されている。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014年1月7日受付, 2014年5月26日審査終了)